



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

October 31, 2018, No. 45

【役員名簿(2018年10月現在)】(五十音順)

代表：結城 正美 (金沢大学)
副代表：小谷 一明 (新潟県立大学)
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：辻 和彦 (近畿大学)
事務局補佐：
日野原 慶 (大東文化大学)
山田 悠介 (大東文化大学)
会 計：河野 千絵 (日本大学・非)
浜本 隆三 (甲南大学)
監 事：村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
ニューズレター編集委員：
澤田 由紀子 (甲南大学・非)
菅井 大地 (松山大学)
豊里 真弓 (札幌大学)
会誌編集委員：
相原 優子 (武蔵野美術大学)
塩塚 秀一郎 (京都大学)
芳賀 浩一 (城西国際大学)
平塚 博子 (日本大学)
Bruce Allen (清泉女子大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (長崎外国語大学)
山城 新 (琉球大学)
評議員：浅井 千晶 (千里金蘭大学)
池田 志郎 (熊本大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
大野 美砂 (東京海洋大学)
上岡 克己 (高知大学名誉教授)
黒崎 真由美 (関東学院大学)
塩田 弘 (広島修道大学)
John Rippey (滋賀県立大学)
管 啓次郎 (明治大学)
高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子
巽 孝之 (慶応義塾大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
波戸岡 景太 (明治大学)
林 直生 (滋賀大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：笠間 悠貴 (明治大学・院)
広 報：喜納 育江 (琉球大学)
塚田 幸光 (関西学院大学)
松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)
管 啓次郎 (明治大学)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学名誉教授)
山里 勝己 (名桜大学)
結城 正美 (代表)

Society 5.0における生の行方

代表 結城 正美 (金沢大学)

地方に暮らす私にとって、インターネットの発展はありがたい。ひと昔前は、地方大学の教員は東京出張のたびに書店で専門書を物色するのが常であったが、現在はネット注文すれば早くて翌日に欲しい本が届く。論文もネット上で公開されていたりワンクリックで入手できるものが多い。情報面での地域格差の是正はインターネットの恩恵の一つであろう。

しかし、最近よく目にする「IoT」や「AI」となると、私には実感しづらいところがある。こうした用語がメディアに頻出する背景には、政府が推進する「第4次産業革命」と、それに基づく「超スマート社会」(Society 5.0)の構想がある。Society 5.0は、狩猟社会(1.0)、農耕社会(2.0)、工業社会(3.0)、情報社会(4.0)に続く新たな社会を指し、2015年にこれを提唱した内閣府によれば、「人が行う能力」の「限界」や「年齢や障害などによる労働や行動範囲」の「制約」という情報社会(Society 4.0)の問題点をIoTやAIで克服し、「今までにない新たな価値を生み出し」、「希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合える社会、一人一人が快適で活躍できる社会」を目指すという

(http://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html)。

IoTやAIを通して過疎化や経済格差が解消され、誰もが輝く社会になるという薔薇色の構想だが、そのような社会における「新たな価値」とは一体どのようなものなのだろうか。上記サイトには具体的な事例が示されており、「農業」「ものづくり」「食品」などの項目を見てみた。いずれもビッグデータやAIの解析に基づくニーズの分析や環境管理の自動化を前提とし、天候の影響もロスもない「スマート」な社会システムにおける「快適」な暮らしが描かれている。

Society 5.0のビジョンは、徹底した情報・データ管理により「便利」で「快適」な生活が望めるというものだが、気になるのは人間の関与のあり方である。IoTもAIも人間が作り出すという意味では、Society 5.0には当然人間が関わっている。しかし、政府の説明を見ながら、Society 5.0では身体知、日常知、伝統知は完全に関心の外にあるのではないかという懸念を抱いた。他分野との協働が視野に入れられているにせよ、情報技術やITに長けた専門家主導の社会構想に問題はないのだろうか。

専門知偏重への批判は、レイチェル・カーソン『沈黙の春』（1962年）に既に明確にうかがえる。

いまは専門分化の時代だ。みんな自分の狭い専門の枠ばかりに首をつっこんで、全体がどうなるのかがつかない。

いやわざと考えようとしなない人もいる。またいまは産業の時代だ。とにかく金をもうけることが、神聖な不文律になっている。殺虫剤の被害が目に見えてあらわれて住民が騒ぎだしても、まやかしの鎮静剤をのまされるのがおちである。(R.カーソン『沈黙の春』青樹築一訳、新潮文庫、1992年、p.24.)

第二次世界大戦後、産業の推進と知の専門分化はタグを組み、効率という新たな価値を生み出した。DDT散布によって「害虫」は一気に駆除できる。しかし、とカーソンは問う。化学物質の影響が、害虫だけでなく、土壌や水、ひいては人間に及ぶということが理解されているのか。そもそも「害虫」とみなされているものは生態系全体において有害なのか。害虫駆除だけに向けられた専門知は「全体がどうなるのか」を考えていない。『沈黙の春』は化学物質の過剰使用に対する警告として知られているが、より根本的には、「専門分化の時代」に対する警鐘と理解されるべきであろう。

加えて、カーソンを『沈黙の春』執筆に向かわせたのが、DDT散布で鳥が姿を消したことへの懸念を綴った知人からの手紙だったことにも注意したい。害虫はいなくなったが何かがおかしいと感じた人(びと)は、庭に鳥が飛び交う日常を経験していたからこそ、異変に気づいた。害虫だけに関心が向いていれば、鳥のなくなった環境を不穏に感じることはなかったかもしれない。

カーソンの時代は専門知を疑う経験知がはたらいていたが、現在はどうか。啓発的な食研究者として知られるマイケル・ポーランは、代表作『雑食動物のジレンマ』（2006年）の冒頭で、専門知に依存した現代の食環境に警鐘を鳴らしている。「今日の夕食は何にする？」この何気ない問いを私たちは日々発しているが、何に基づいて食べるものを決めているのだろうか。食べたいもの、食べるべきもの、逆に避けるべきもの、など判断基準は複数ありうるが、ポーランが注意を促すのは、何を食べるかを判断する際の専門知への依存である。

アメリカがかつて持っていたのかもしれない、食についての先祖伝来の知恵は、いまや混乱と不安にすり変わってしまったようだ。何を食べるか決めるという最も根源的な行為に、専門家の大量のアドバイスを求める。ジャーナリストに食品の出どころを

調査してもらい、栄養学者に夕食のメニューを決めてもらう。(M.ポーラン『雑食動物のジレンマ』(上)ラッセル秀子訳、東洋経済新報社、2009年、p.7)

自分で判断することが困難になった背景には、家族や地域で伝えられてきた経験知の衰退だけでなく、現代の食環境の工業化も関わっている。加工食品はもとより生鮮食品も、どこで誰がどのように作ったものかを知るのは容易ではなく、安全性が判断できない。栄養学者も含め専門家への依存はますます高まるであろう。

工業化と情報化を経たSociety 5.0では、専門家という人間すら不要になるのかもしれない。専門知をビッグデータとして集積し、解析して、必要な情報を送るというシステムが動き出せば、人の関与は限りなく小さくなるのではないか。

そのような社会において、「生きる」とはどういうことなのだろう。生は当然、身体に関わる。そして、生も身体も人文学における重要な研究テーマである。社会の変容とともに身体観は変化してきたが、情報社会における身体知の変容は看過できない問題を生んでいるのではないか。環境作家としても知られるレベッカ・ソルニットの言葉を引こう。

ポストモダンの理論は繰り返し身体について語るけれど、その身体は悪天候に苦しめられることもなければ、異種の生物に遭遇することもなく、原初的な恐怖に駆られることも、大して興奮することもなければ、筋肉を限界まで酷使することもない。要するに、肉体的な企てや戸外での活動に関わることがない。ポストモダニズムが頻用する〈身体〉という語彙自体も受動的なオブジェを指しているきらいがあり、たいてい検査台か寝台に横たえられて登場する。そうした身体は医学と性の象徴であり、感覚と生化学作用と欲望の在処であって、行為と生産の源ではない。肉体労働から解放され感覚遮断タンクのような集合住宅とオフィスビルに収容されたこの身体には、肉体性の残滓のようなエロティックさだけが残されている。……そのような身体があまりに強調されているのは、多くの人にとって、身体に備わる生きることがもっているはずのほかの側面が萎縮してしまったからではないか……。(R.ソルニット『ウォークス 歩くことの本質』東辻賢治郎訳、左右社、2017年、p. 51)

「身体に備わる生きることがもっているはず」のある側面が失われつつあることが事実ならば、専門家や意思決定に関わる人々には、人類が蓄積してきた知に敬意を払い、謙虚に自らの生のあり方を問いながら議論を進めることが求められると言えるだろう。

【大会案内】

2018年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

(2018年9月1日[土]～2日[日])

和歌山大学南紀熊野サテライト (和歌山県田辺市新庄町3353-9 Big・U内)

2018年9月に開催された全国大会は、初の紀伊半島、和歌山県田辺市での開催となりました。2つのシンポジウム、個人発表、院生企画(7頁に報告)、そして貴重なエクスカージョンと充実した2日間でした。会員の方々に両日の内容についてのご報告を頂きました。(写真は明記されていない限り編集委員による撮影です)。

〈第一日目：9月1日 [土]〉

●個人発表報告①

- ・森田直子 (東北大学) 「ロドルフ・テプフェールの徒歩旅行」
- ・岡崎朝美 (北星学園大学・非) 「森林造成の書における文学のカー『森林美学』(ザーリッシュ)における詩『オーク』(K.T.Körner) -」

青田 麻未 (成城大学研究員)

森田直子氏は、ロドルフ・テプフェール(1799-1846)が記した徒歩旅行記の性格と意義について発表された。テプフェールは美術と文学を横断するような表現である「ストーリー漫画」の先駆者として知られる一方、寄宿学校の長として学生とともに徒歩で旅行に繰り出し、その様子を読み物として記した。当時のスイスは急速に観光地化されており、交通網の整備も進んでいた。テプフェールはしかし、速いテンポで移動し、ガイドブックの真似をして名所のみをピックアップして回っていくスタイルから距離を置き、徒歩という遅いテンポで、自分の目で観察する旅を重視した。主観的な作者の経験を語る旅行記というジャンル確立における彼の著作の重要性が示された発表であった。



岡崎朝美氏のご発表では、H・フォン・ザーリッシュ(1846-1920)の『森林美学』の中でT・ケルナーの詩『オーク』が引用されていることの効果が検討された。

ザーリッシュは、効率ばかりが重視される人工林造成業界に対して、人間が喜びを見出せるような森林こそが結果的に良い森林ではないかと主張しており、彼の書物は森林造成書でありながらジャンルを軽々と飛び越えており、詩の引用さえも見られるという。本来、オークという木について森林造成の範疇で説明するならば、この木が多く葉を落とす栄養価の高いものだということが記されれば十分なはずである。そこにT・ケルナーの詩を引用することでザーリッシュは、感性を通じて理解されるオークという木の特徴や、そこから生じる象徴としての意味までも読者に伝えている。

私が両氏の発表から共通して受け取ったのは、広い意味での文学と我々の生活との一枚岩ではない結びつきである。森田氏のご発表では、ガイドブックの真似をする旅と、自分自身で観察をする旅とが対比されたが、これは現代の観光をめぐるでも繰り返される対立である。森田氏の発表からは、旅の記録が単なる情報の網羅ではなく、文学の一ジャンルとしての旅行記となるためには、著者自身の生活の感覚から過度にずれずに旅をする必要があるという気づきを得ることができた。岡崎氏のご発表からは、まずオークという木の印象を書き留めた詩人がいて、さらにその詩を森林造成書に引用することで、オークの木の見方にうまく気づけないでいる人々の目が開かれていくというザーリッシュの期待が読み取れる。彼の仕事からは生活から詩へ、そしてまた生活へ、という文学の動態を感じることができるのだ。

●個人発表報告②

- ・五月女颯 (東京大学・院) 「ヴァジャ=プシャヴェラ「蛇を喰う者」における死の贈与」

大田垣裕子 (兵庫県立大学)

五月女颯氏による発表「ヴァジャ=プシャヴェラ「蛇を喰う者」における死の贈与」では北グルジアの詩人ヴァジャ=プシャヴェラ(1861-1915)の故郷の

伝承を下敷きにした叙事詩において問われる人間と自然の関係性について検討された。「蛇を食う者」の主人公ミンディアはカジェティ（グルジア神話の地獄）でカジ（悪魔）の食糧である蛇の肉を食べて自然の声が聞こえるようになり、また敵の大軍を打ち破る力を得る。花や麦穂は菓や食糧として自らその身を捧げるが、木は自分を伐らなしてくれと懇願する。ミンディアは枯れた枝や草を薪木のかわりにし、村人にもそうすることを勧めるが誰も耳を貸さない。しかし、妻からの薪や肉の要求に応じたためにその力は失われてしまう。彼は罪を贖うために多くの牛を屠るがそのかいもなく、敵を前にして味方に助言を与えることができない。村に火が上がるのを見て自死する。

作中の自然による自己供儀がデリダの贈与論やキリスト教論を敷衍しつつ、キリスト教の教義を超える環境保護の視点から論じられた。デリダによれば贈与は贈与と認識された瞬間に贈与ではなくなり、交換のエコノミーに組み込まれる。エコノミーを成立させるためには、贈与に対して理性をもって収支計算し過不足なく正しく返礼（応答）する必要がある。反対に贈与を可能にするのは狂気であり、それはすなわち非ロゴス、非-トポスで、アナロジー・象徴でしか表すことができない。五月女氏はここでの自然の供儀は、創世記のイサクの供儀のアレゴリーで互酬的で対称的な交換が断ち切られる非対称的な関係における死の贈与とそれへの返答であると解された。ミンディアから自然への返礼は先延ばしにされ負債となっており、彼の自死は自己供儀と示唆された。贈与は返礼との間に「時間を与え」、それが物語や詩学の必要性を生むと述べられた。この物語の自然の声が聞こえる「エコトピア」は同時に交換のエコノミーを開始する、生命のやり取りが贈与として現れる場所である。自然の見返りのない贈与に対して、交換のエコノミーを「人間」が「理性」をもって完遂させ得るか、という応答可能性＝責任の問題が投げかけられているとし、人間と自然の関わりへの新たな視座が提示された。



発表時にご紹介のあったプシャヴェラの異民族との争いに明け暮れる人々を描いた叙事詩「アルダ・ケテラウリ」と「客と主人」の一部を映像化した映画「祈り」を見る機会を得た。作中の主人公たちは敵を認め敬意を払う行動をとったがために社会の怒りをかい、村を追われる、あるいは自ら死を選ぶ。復讐の相互性・交換の円環を断ち切る彼らの行為はデリダの『死を与

える』の中で開陳される「敵を愛せ」というキリストというロゴスに通ずるのではないか。映画冒頭で語られる「人の美しき本性が減びることはない」というプシャヴェラの詩「我が嘆願」の一節が心に残る。

●個人発表報告③

- ・大須賀匠（東京農業大学・院）「宮沢賢治の童話作品から学ぶ自然動物の捉え方—『注文の多い料理店』に登場する山猫と思われる存在の検証—」
- ・金星（長崎大学・院）「陳昭如『被遺忘の一九七九：台湾油症事件30年』と石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』に見られる食中毒事件についての考察」

賀 樹江（金沢大学・院）

大須賀匠氏は陸前高田における間伐材を利用する木炭発電の普及教育活動についての研究をきっかけとして、環境問題教育のあり方の研究に目を向けるようになったという。大須賀氏の発表では、ESD（環境教育/持続可能な地域・社会に向けた教育）の現場で賢治が当時の社会問題の解決策として描いた再生可能エネルギーのとらえ方を、現代社会にも活かすうる智慧として紹介した経験が語られた。それから、宮沢賢治の『注文の多い料理店』に登場する山猫と思われる存在への現実的なアプローチとして、経営者策略、調理の手順、山猫の食事量などの分析によって、山猫の経営者タイプ、習性、及び目的が検証された。

『注文の多い料理店』における虚構の世界の考察について、従来の研究で一般的なのは、人文学からの視点で行うものである。大須賀氏のように、作品内における描写を実験・検証する手法は、非常に面白いが、その方法では作品の世界を十分に解釈できないのではないかという意見もあった。



金星氏の発表では、台湾作家陳昭如の『被遺忘の一九七九：台湾油症事件30年』（『忘れられた一九七九：台湾油症事件30年』；2010年、台湾・同喜文化出版社）と石牟礼道子の『苦海浄土』における患者の症状の描写に焦点を当て、其々の被害者表象の異同が論じられた。

金氏は、陳はジャーナリストとして、インタビューおよび文学的表現で患者の苦しみを描きながら、専門家による論文及び調査等の関係資料も引用しており、

『被遺忘的一九七九：台湾油症事件30年』は記録性が強く、一方で石牟礼の『苦海浄土』は、「観察者」に止まらず、語りのあらゆるところに溶け込み、自分の言葉で患者の苦しみや回想を記録することから、物語性が強いと結論付けた。金氏の環境文学についての定義と分類は会場から更なる熟考をとの声もでたが、国の枠組みを超えて環境文学を検討する金氏の試みは評価すべきであろう。



●シンポジウム1「石牟礼道子追悼シンポジウム」

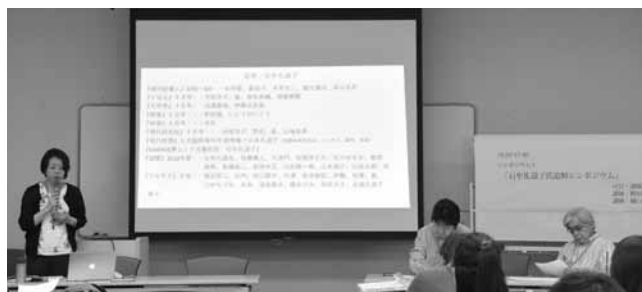
講師：野田研一（立教大学名誉教授）「《魂の秘境》とはなにかーその構造をめぐって」

樋口大祐氏（神戸大学）「石牟礼文学における非定住芸能民の「記憶」についてー『西南役伝説』を中心にー」

司会：結城正美（金沢大学）「渚の文体ー初期作品から『苦海浄土』へ」

中川 僚子（聖心女子大学）

本年2月10日に逝去された石牟礼道子氏を追悼する本シンポジウムでは、「日本における代表的な環境文学として、石牟礼文学を今後どう読んでいくか」という結城正美氏の問題提起に応える形で、発表者がそれぞれに石牟礼文学をめぐる新たな思索の道筋を示し、示唆に富むものとなった。



野田研一氏は、『春の城』を主たる分析対象とし、「形見」としての自然物のありかたを手がかりに、石牟礼文学における<魂>という概念を検討した。「形見」とは、たとえば天草の墓地に群生するミゾソバの花である。花は今ここに咲くモノでありながら、島原の乱で犠牲になった「百姓たちの血汐」を思い出すための象

徴でもある。人の係累が途絶えた場所でも、記憶を伝え続ける形見として自然物は歴史性を賦与され、「現在にして過去」という二重性を帯びる。

形見性は、過去・現在・未来の人間とも私たちをつなぐ。「昔このあたりにいた魂が、生きている者たちに、形影相伴うようなかたちでふっと出てくる。そういう時に、あたりの景色も意味を持ってくる」という石牟礼の言葉は、人間を含む全存在が、「形」と「影=魂」という不即不離の二重性を帯びた存在であることを示唆すると野田氏は述べる。モノ、自然物を含め、他者と自分との間に、<魂>を預け合い、預かり合うような、もっと豊かな関係を想像することが可能かもしれないと思わされる発表であった。



樋口大祐氏は、『西南役伝説』の20年近い執筆過程で生じた複数の主題間のずれを論じた。石牟礼は文字をもたない、読めない、いわば前近代を生きる人々の思想に寄り添うことで近代の相対化を企図したが、作品前半において、西郷隆盛が自決せず大陸にわたって日清戦争の勝利に寄与したとの伝説を信じる老人たちの世界観を内側から共感的に描いたことは、皮肉にもアジア主義への同調、作者自身の国家観や資本主義観の未成熟と見える効果をもったという。樋口氏が『西南役伝説』の転換点ととらえるのは、沃土の夢と故郷天草への郷愁にひきさかれる北薩への移民を描いた「天草島私記」である。特に天草移民の出来について、前史としての弘化一揆を石牟礼が「発見」したことの重要性が説かれ、具体性に富む論究であった。

結城氏の発表は、1970年執筆の「とんとん村」に登場するゆきという人物をめぐる考察であった。書くことに存在の燃焼を求める一方で、日常のわずらわしさに懊悩するゆきに、氏は著者自身の姿を透かし見る。『苦海浄土』の元となった「奇病」、そして『苦海浄土』の「ゆき女聞き書き」に登場する同名の女性とつなげて、『苦海浄土』の再読を試みたいという。今後の展開が大いに期待される。

冒頭、結城氏が紹介した未発表の詩「生存」（1970年作）は、「ともかく/夜が明けるから/もう/ねむってみようではないか」と結ばれる。残された私たちは石牟礼文学をどう読み継いでいけばよいのか、石牟礼文学をめぐる重要なヒントが与えられたシンポジウムであった。



全国大会一日目での集合写真

〈第二日目：9月2日 [日]〉

●シンポジウム2「《エコロジスト・南方熊楠》再考」

パネリスト：田村義也氏（成城大学・非、南方熊楠顕彰会学術部長）「南方熊楠と熊野」
安田忠典氏（関西大学）
「南方熊楠はエコロジストなのか？」
司会：志村真幸氏（慶應義塾大学・非）「南方熊楠と和歌山の柑橘類—郷土振興という側面から」

小谷 一明（新潟県立大学）

田辺市は南方熊楠（1867-1941）が半生を過ごした地である。今回は、同地に建つ顕彰館に関わりながら南方研究を重ねる3名のパネリストにご登壇頂き、本シンポジウムが行われた。午後に熊楠邸、顕彰館を訪問する予定も生まれ、2日目の大会では熊楠と熊野を見直す絶好の機会となった。

最初に田村義也氏より、シンポのタイトルにある「エコロジスト・南方熊楠」を再考すべく、南方の来歴、研究の概要が説明された。自らもエコロジストという表記に関わった経緯を語りながら、田村氏は南方が見た熊野の自然について言及する。江戸から昭和を生きた近世文化人、南方は33歳で熊野と出遭った。エコロジストという呼称に深く関わる合祀反対運動の頃も、南方は同地に来たばかりで、外来者の視点で熊野を見ていたのではないかと田村氏は言う。日露戦争後の伐採が進む明治後期、照葉樹の生い茂る自然林は絶滅の危機にあった。

安田忠典氏は、2004年に紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道を含む）がユネスコの世界文化遺産となつてから、過剰なエコ・イメージが流布したと述べる。和歌山の森林は現在、99%が植林で、保水力がなく土砂崩

れも多い。南方による神社合祀反対運動で保全された「熊野九十九王子」の1つ、八上王子もユネスコに認定されたが、そこから1970年代に鶴見和子が命名した「自然保護の先駆者」として南方を定位できるのかと問いかける。合祀反対の渦中で書かれ、顕彰館にて翻刻された「南方二書」にある8項目のうち、1項目「天然記念物を滅却す」のみが「エコ」的と言えるが、内容は国粹主義的だという。熊野では今も環境の保全より文化的な保護が中心であると安田氏は述べた。

志村真幸氏も、熊楠が見た山は原生林だったのか、と問いかける。江戸時代に植林が始まり、明治になると伐採が進む。南方が目にした熊野には「禿げ山」が多かったと推察する。また、現在、熊野の里山にはウメ、柑橘系果樹園が多い。山の斜面を利用した樹園地が農地の87%（2010年の統計）を占めているが、この起源に南方も関係していた。南方は柑橘系の換金作物を庭に多く植えたが、植民地台湾でも栽培を奨励したという。都市部や軍部との関係から里山が果樹園に変容する来歴に南方を置き、熊楠と熊野が読み直された。



このシンポジウムでは田村氏を中心に南方像の読み直しははかられ、熊野という場の実像にふれることもできた。21世紀になり南方関連資料の整理が終わり、研究が新たな段階に入ったことを知る事ができ、充実した学びとなった。

●フィールドトリップ

今村 隆男 (和歌山大学)

シンポジウムで、熊楠が安藤みかんの栽培を奨励し自然保護よりも地域の経済振興を優先したという話を聞いた。江戸時代(最後の年)生まれの熊楠を現代の環境観で解釈してはいけないということだが、彼の神社合祀反対運動がいくつかの鎮守の森を守ったことは確かだ。その貴重な自然遺産を現地観察するのが、今回のフィールド・トリップの目的である。まず、雨について最大の目標である神島に向かった。通常は上陸する者のない神島は、自然の生き物の宝庫だ。足元を見ればヤドカリやフジツボなど足の踏み場もないほどで、探せばノミガイなどの熱帯系の絶滅危惧種の貝類も多いという。森を見れば、紀南の海岸線の一部にしか分布しない袴葛(別名ワンジュ)など多彩な植物が繁茂していた。照葉樹林につる性植物が絡んでいるその状態は、比較的若い森の特徴だという。小さい「こやま」の伐採は人為が原因で、大きい「おやま」の森の一部が失われたのは台風などの自然災害によるそうだ。神域だった神島の森も原生林のままではなく、これまでも様々な変遷を重ねて来たのであり、今後どうなってゆくのか保護下でも予測不能だという。

帰港後に向かったのはこれも熊楠に守られた二つの神社で、熊野参詣の九十九王子の一つ八上王子にはシ



(撮影：今村隆男氏)

ダジイ(椎)の森が残されていた。そこから地域の生活道と一緒に熊野古道を進むと田中神社があり、田の中のこんもりとしたその森はわずか数本の楠の古木で形成され、根元には延宝年号の手洗鉢が飲み込まれかけていた。旅の最後は田辺市内にある熊楠の旧邸で、隣は資料館である顕彰館だ。熊楠の足跡の大きさを実感する今回の旅は、人知を超えた自然の力を教えられる機会ともなった。

【ASLE-J Grad Journal (院生組織だより)】

2018年度全国大会 院生組織 グループ発表「鯨」報告

高橋 実紗子 (聖心女子大学・院)

大会前夜、太地町・梶取崎にある供養塔の前にたつ。鯨を模った石像も自分の足も暗闇に溶けこみ、岬の縁で、うねる紺色の波を覗きこむと、自分の鼓動か、くじら博物館で聞いた鯨漁の太鼓の音か、どう、どう、という音が耳に響いた。昼間に水しぶきを浴びながら初めて見た鯨の姿にも、巨大な生きもののような湾にも、唸る夜の海にも圧倒されていた。

院生グループ発表「鯨」では、前日に太地町を訪れ、第1日目に発表を行った。笠間悠貴(明治大学・院)は前日の報告と森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』の書評を行い、近代捕鯨の誕生から保護にいたる歴史を辿る。反／捕鯨を取りまく問題と、それを打開しうる他者の痛みへの共感、「汎人間中心主義」を示し、開かれるべき「他者性への通路」を検討した。

青田麻未(成城大学研究員)はEmily Bradyの表現的性質論を用いて鯨の美的価値を考察する。Bradyによる動物の美的価値とは、感情を通じて見出される人間との類似性だけでなく、崇高さ(sublime)をもたらす非類似性にも存在する。鯨の美的価値の重要な一例として、雄大な海へとつながる「水と切り離せない」異質性が提示された。

続いて高橋実紗子(聖心女子大学・院)が初期近代の英語博物誌が描く鯨を調査する。未知なる鯨は、占

有可能な場所の比喩を用いて理解されると同時に、人々が理解することのできない海を体現する驚異(wonder)でもあった。

最後に戸張雅登(立教大学・院)がディープエコロジーとバイオリージョナリズムからGary Snyderの詩“Mother Earth”を読み解く。Snyderは脱人間中心主義のひとつの形として、人間と動物の共通項=人間性(spirit)を見出し、あらゆる自然物を等しく「人々」と呼ぶ。作中、大海を自由に移動する鯨は、多様な生命の器たる地球そのものとも解釈できよう。



人間も海も鯨も、他者がともにあった岬での夕闇を思いつつ、今回、体験を交えながら他者・鯨と対峙する際の姿勢を多角的に再考できたことは非常に有益であったと感じている。

【ASLE-Japan 例会報告】

ASLE-Japan 2018年6月例会報告

「場所と言葉、場所の言葉—小説家・木村友祐さんと
翻訳者・Doug Slaymakerさんの対話を中心に—」

2018年6月2日（土）於 大東文化大学・大東文化会館

日野原 慶（大東文化大学）

「君は間違っていたんだ／関東弁の集合体／君は間違っていたんだ／ずっと間違っていたんだ」——おおたえみりが2012年に発表した「集合体」の歌詞だ。例会からの帰り道、この歌のことを考えた。木村友祐さんによる『幸福な水夫』を読み、心を突き刺された一節と響き合っているように感じたからだ。「おらはそったもん認めてねえぞ、言葉にヒョージュンだなんだあってたまるがよ。あえて標準語ってへるんだば、おらんの標準語は南部弁だの津軽弁だ、いや、南部語に津軽語だ。」ヒョージュンとしての「南部語」や「津軽語」から見れば、東京圏で話されている（と想定される）言葉の方が「関東弁」になる。理の当然とも言えるこのことを忘れて、わたしは東京に暮らしてきた。



「場所と言葉、場所の言葉」と題された当日の講演で焦点が当てられたのは方言だ。方言をもちいて小説を書くという探究の原点には、石牟礼道子の『苦海浄土』に刻まれた水俣の言葉に心をひきつけられたという経験があるのだと木村さんは語る。自身の出身地である八戸の言葉で書くこととは、木村さんが言うところの「田舎の時間」に触れ、それに表現を与えるための手段である。ただ字面のみを方言に置きかえるといった試みではない。特定の場所に宿る固有の時間の流れを身に帯びた言葉をもとめて、東京に暮らす作家が故郷にもどり、耳をすます。じっくりと。執筆の対象とする場所に身を置くことがご自身の創作にとってい

かに大切な要素であるかを語る木村さんの言葉聞き、上のような姿が頭にうかんだ。講演の終盤では、木村さんが『幸福な水夫』から一部分を音読した。耳にとどく南部弁の遅さと重さになによりも驚いた。文字の向こう側に存在する場所と生活のありように、ほんのわずかではあるが、近づいた瞬間だと言えるのかもしれない。

もちろん、「場所の言葉」が伝える場所とそこでの日常のありようは、いくら近づこうとも、外部に生きるわたしにとっては、到達困難な対象としてあり続ける。言葉と場所との不可分な関係性について論じ、別の「場所の言葉」としての英語で南部弁を訳すことの難しさについて語ったSlaymakerさんの認識も、同様のものではあった。しかし、現実には、Slaymakerさんは木村作品の翻訳を完成させた。南部弁それ自体の翻訳とはことなる形で。そもそものはじまりとして、木村さんは小説を書いた——南部弁で人々が生きる日常を、ことなる日常を生きる読者につきつけるような言葉で。特に東京に暮らすわたしにとって、このような「場所の言葉」を読むことは、標準語という枠組みが恣意的なものであることを強く再認識させられる経験である。中心としての八戸（ここにはどんな地名だって入る）の、遠く離れた周縁である東京で話される言葉こそが方言だ。このような形で個人の認知地図の更新をうながす点に、「場所の言葉」の可能性の一端を見出すことができる。



【研修記】

アプリ生活@マンハッタン

辻 和彦 (近畿大学)

地下鉄の駅を上がると、横殴りの細かい雨だった。

重いスーツケース二つを必死で引きずりながら、でこぼこのアスファルトを歩く。みるみる上着が濡れていく。車道を走るタクシー達が、クラクションをならし、濡れネズミになった私に併走しながら、乗れよと指で合図する。もうそこが目的地だ、と身振りで伝え、歩き続ける。ようやく着いたホテルの玄関ガラスを押す。閉まっている。もう日が変わる直前だから。呼び鈴を押し続け、軒先に座り込む。雨を眺めながら、今夜はここで野宿かと思い始めた頃、カチリと解錠された音がした。フロントに眠そうな従業員。助かった。

こうして私のマンハッタン生活が始まった。マンハッタンの数多くの研究施設や図書館を効率的に廻りたいという思いで、この在外研究を企画した。一つの研究機関に張り付かず、街中で自分が選んだ住居に住まうという在外研究スタイルは、やはり珍妙なものであったのかもしれない。

一日に複数の施設を回ったりしていると、必然的に荷物は軽量化したくなる。こうして私はどんどんスマホ依存となっていき、地下鉄経路と運行状況確認アプリ、銀行など金融関連アプリ、FedEx、UPS、USPSといった宅配アプリなどに頼りきり、ひたすら歩き、ひたすらスマホの画面を眺めるようになっていった。フード・ピックアップのアプリ、もちろんUber、ウェアブル端末リンク健康管理アプリ、必須のAmazon.com。案の定というか、お約束のように、文字通り命の次に大切となっていたスマホを公園で壊してしまった時は、まったく閉口してしまったものだ。

四月。JFKから成田行きの航空機に乗り込む日がやって来た。来たときと同じように、去る時も雨なのだろうと思っていたが、見事な晴天だった。眩しい太陽の下、二つのスーツケースを引っ張り、地下鉄でJFKに向かった。

【ご著書紹介】

『反復のレトリック—梨木香歩と石牟礼道子と』

(水声社、2018年1月)

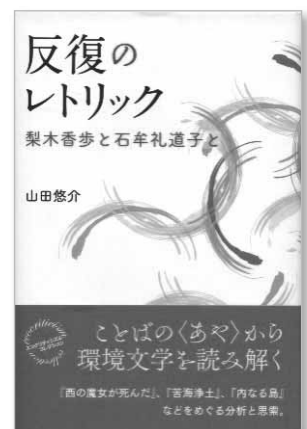
自然と人間の関係や、両者の「コミュニケーション」が描かれた文学テキスト。そこでは、同一あるいは類似の（と読者が認識可能な）要素——音、語、語句、構成など——が、くり返されていることがままある。たとえば梨木香歩。たとえば石牟礼道子。エドワード・アビー、リチャード・ネルソン、テリー・テンペスト・ウィリアムス……。それは一体なぜなのか。なぜそのような描き方がなされているのか。そこから何を読み解くことが、できるのか。

坂部恵の哲学、佐藤信夫のレトリック論、ロマン・ヤコブソンの言語論・コミュニケーション論、チャールズ・パースの記号論など、環境文学研究の知見に加え、広く、言語や記号に関する学知も参照しながら、これらの問いにこたえようとする。言語によって自然と人間の〈類似性〉がいかに創出されるか、自然との「コミュニケーション」における〈うた〉の機能について、自然を「コミュニケーション」の「主体」となす上での反復の役割など、環境文学テキストの分析を通して、自然・人間・言語について考察すること。それが、2017年3月に立教大学に提出した博士論文に加筆・修正を加え、水声社より刊行中の「エコクリ

ティシズム・コレクション」の一書として出版された本書『反復のレトリック——梨木香歩と石牟礼道子と』で試みたことでした。

本書は博士論文をもとにしたものですが、環境文学研究はもとより、レトリック論やコミュニケーション論への入り口ともなればと思ひ、なるべく平易な記述を心がけました。課題も多く残されてはいますが、分析したテキストや参照した理論的枠組みが読者の皆さんのご興味やご関心とどこかで響き合うことがあれば、また、文学の〈ことば〉そのものを〈読む〉ことのおもしろさを少しでも感じていただければ、それほど嬉しいことはありません。お手にとってご覧いただければ幸いです。

山田悠介(大東文化大学)



【シリーズエッセイ 風景のカタチ (5)】

enyaと車窓の風景 ～きわめて私的な、「場所」としての原風景～

松岡 幸司 (信州大学)

「風景」とは自己の内面を投影したものであり、その意味ではきわめて私的なものである。二人並んで同じ山並みを見ても、その目に映る風景は違ったものになる。そしてその「風景」は、私的なものであるがゆえ、個々人の心の奥深くへとつながっている。

アイルランドの歌姫enyaのアルバム「Shepherd Moons」を聞くと、僕の心には、恐らくドイツ人ならば“Ach, Melancholie! (ああ、メランコリー!)”とつぶやくような感情が押し寄せる。負の感情ではない。秋の日の森に射し込む夕日のように、冷えた空気の中にわずかな暖かさを届けるようなものだ。そして特に一曲目の「Shepherd Moons」の冒頭二小節の和音は、僕の目の前にドイツの車窓の風景をよみがえらせる。様々な茶色と緑、そして青と白のコントラスト。26歳の夏の日が、僕によみがえってくる。



あの日曜日の午後、僕はアイゼナハからドレスデンへ向う列車に乗っていた。コンパートメントには僕一人。森、広大な畑、丘のつらなる田園風景を繰り返す車窓は、常に僕の心を惹きつけた。ある小さな駅の周りでは、お祭りのようなものをやっていた。40～50人くらいの人々が笑顔で集まり、語り合い、踊っていた。郊外農園のような所では、老夫婦が二人、額に汗して茶色い土に来年の緑を育てていた。丘はどこまでもうねり、森は奥深く続く。それがドイツの車窓だ。そしてそのような時、僕はいつもカセットでenyaのアルバム「Shepherd Moons」を聞いていた。

92年の夏、初めて乗った飛行機で僕はドイツに行っ

た。ドイツ語のサマーコースに参加するためだ。場所は、東西再統一後まだそれほど経っていない旧東ドイツの都市ドレスデン郊外の町だ。なぜそこを選んだかという、確かに日本人がいないだろうから。実際にコースにも町にもおらず、地元の新聞社から町の印象に関する記事を依頼されたくらいだった。この時のドイツ滞在は、ある意味で僕の原点の一つとなった。その5週間には僕のアイデンティティを喚起するある種の原風景が数多く潜んでいる。それらの原風景を呼び覚ますのが「Shepherd Moons」なのだ。実際に20年以上経った最近まで、アルバム冒頭の音のつながりを耳にするたびに、一瞬ではあるが、僕は動きを止めてしまっていたほどだ。心の中、そして頭の中に、あの夏の日々が一気に広がってしまうから。

地平線の彼方、森の端まで続くひまわり畑を見た朝
眠れぬ夜に耳にした、時を告げる遠い教会の鐘
いつも穏やかに流れていたエルベ川の水面
夕暮れに、骨の髄まで沁み入ってきた教会の鐘の音

汗をふいて歩いたシュヴァルツヴァルトの森歩き
腕組み森を歩いていた老夫婦
草原に降りそそぐ夏の太陽
いつでも陽気な宿の主人

確かに過去は美化される。25年以上経った今、さすがに少し色褪せてきてはいるが、過去における本質のようなものは記憶の中にしっかりと残っている。あの夏の日々、僕は初めて「一人」になったんだ。家族を離れ、日本を離れ、日本語を離れ、見たことのない町で、聞いたこともない音に囲まれ、必死になって自分の周りにあるものとのつながりを求める一人の存在。日本人だとか、松岡家の次男だとか、そういったものから離れ（解放され?）たKoji MATSUOKAという一人の人間（=地球人。いや宇宙人かも）。そして、己れの「場所」をなくした「危うい存在」としての僕は、そのラーデボイルという町で、自分の出発点としての「場所」を獲得した。精神的な「故郷」である。自分が自分でわからなくなった時に必ず戻るのは、あの暑い夏の日々の本質。そんな時、僕は怖々とCDプレイヤーのスイッチを入れたものだ。最初の音のつながりが無言で僕に語りかけ、強制的に精神的な「故郷」

へ引き戻す。そこは、あの暑い夏の日。古ぼけた路面電車が走り、クルミの木にはまだ青い実が生っている。門を出て通りを右へ曲がると、そこは森の始まり。

僕の森はどこにあるのか？
僕の大地はどこにあるのか？
僕の枯れ枝を落とす故郷の土はどこにあるのか？
まだまだわからない、だからこそ僕は生きていくのだろうか？

僕という危うい存在の旅は、森から森へと綱渡りのような森歩きを繰り返す。いつかどこかの森で僕は自分探しの道を見つけるのだろう。そしてその時になって、過去ではなく目の前に新しい風景がはじまり、自分が帰るべき「故郷」という「場所」を獲得することになる。

文献情報 (2017年11月~2018年10月)

[2017年11月]

- ・Derek Gladwin, *Ecological Exile: Spatial Injustice and Environmental Humanities* (Routledge)
- ・Hisaaki Wake, Keijiro Suga, Yuki Masami (Eds.), *Ecocriticism in Japan* (Lexington)
- ・John Charles Ryan (Ed.), *Southeast Asian Ecocriticism: Theories, Practice, Prospects* (Lexington)
- ・Peter C. Mancall, *Nature and Culture in the Early Modern Atlantic* (U of Pennsylvania P)

[2017年12月]

- ・武田将明・飯田橋文学会 (編)『現代作家アーカイヴ2：自身の創作活動を語る』(東京大学出版会)
- ・Renee Hulan, *Climate Change and Writing the Canadian Arctic* (Palgrave)

[2018年1月]

- ・山田悠介『反復のレトリック—梨木香歩と石牟礼道子と』(水声社)
- ・木村朗子『その後の震災後文学論』(青土社)
- ・篠原雅武『人新世の哲学—思弁的実在論以後の「人間の条件」』(人文書院)

[2018年2月]

- ・Peter Quigley, Scott Slovic (Eds.), *Ecocritical Aesthetics: Language, Beauty, and the Environment* (Indiana UP)
- ・Douglas A. Vakoch, Sam Mickey (Eds.), *Literature and Ecofeminism: Intersectional and International Voices* (Routledge)

[2018年3月]

- ・石牟礼道子『西南役伝説 (講談社文芸文庫)』(講談社)
- ・山田豊『ワーズワスと紀行文学—妹ドロシーと共に』(音羽書房鶴見書店)
- ・クリストフ・ボヌイユ, ジャン＝パティスト・フレソズ (著), 野坂しおり (訳)『人新世とは何か—地球と人類の時代—の思想史』(青土社)
- ・高橋綾子『ゲリー・スナイダーを読む—場所・神話・生態』(思潮社)
- ・Timothy Morton, *Being Ecological* (MIT P)

[2018年4月]

- ・「現代思想 2018年5月増刊号 総特集◎石牟礼道子 (現代思想 5月臨時増刊号)」(青土社)
- ・水俣フォーラム編『水俣から 寄り添って語る』(岩波書店)

- ・水俣フォーラム編『水俣へ 受け継いで語る』(岩波書店)
- ・石牟礼道子『魂の秘境から』(朝日新聞出版)
- ・若松英輔『常世の花 石牟礼道子』(亜紀書房)
- ・小野俊太郎『太平洋の精神史—ガリヴァーから「パシフィック・リム」へ』(彩流社)
- ・中西佳世子, 林以知郎 (編著)『海洋国家アメリカの文学的想像力—海軍言説とアンテベラムの作家たち』(開文社)

[2018年5月]

- ・河出書房新社編集部 (編)『石牟礼道子 (KAWADE 夢ムック 文藝別冊)』(河出書房新社)
- ・Hilary Thompson, *Novel Creatures: Animal Life and the New Millennium* (Routledge)
- ・Dennitza Gabrakova, *The Unnamable Archipelago: Wounds of the Postcolonial in Postwar Japanese Literature and Thought* (Brill)

[2018年6月]

- ・石牟礼道子『綾蝶の記』(平凡社)
- ・芳賀浩一『ポスト<3・11>小説論—遅い暴力に抗する人新世の思想』(水声社)
- ・Simon C. Estok, *The Ecophobia Hypothesis* (Routledge)

[2018年7月]

- ・石牟礼道子, 田中優子, 高峰 武, 宮本 成美『毒死列島 身悶えしつつ (追悼 石牟礼道子)』(金曜日)
- ・石牟礼道子, 伊藤 比呂美『新版 死を想う (平凡社新書)』(平凡社)
- ・宇野毅, 市川仁, 石原孝哉, 伊澤東一 (編著)『田園のイングリッド—歴史と文学でめぐる四八景』(彩流社)

[2018年8月]

- ・北野圭介 (編)『マテリアル・セオリーズ—新たなる唯物論にむけて』(人文書院)
- ・Martin Hultman, Paul M. Pulé, *Ecological Masculinities: Theoretical Foundations and Practical Guidance* (Routledge)

[2018年9月]

- ・石牟礼道子・志村ふくみ『遺言 (ちくま文庫)』(筑摩書房)
- ・Ben Etherington, Jarad Zimler (Eds.), *The Cambridge Companion to World Literature* (Cambridge UP)

[2018年10月]

- ・Nicole Seymour, *Bad Environmentalism: Irony and Irreverence in the Ecological Age* (U of Minnesota P)

事務局より

■2018年度ASLE-Japan/文学・環境学会
第2回役員会・総会のご報告

2018年9月1, 2日の両日に、和歌山大学南紀熊野サテライト (〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町 3353-9 Big・U内) において第2回役員会、総会が開かれました。まず審議事項として、2017年度会計報告および監査報告、2018年度予算案が提案され、審議の結果、承認されました。また一部役員改選案、2019年度全国大会案、資料と会誌残部処理、2020年ISLE-EAの開催時期と開催場所、会費未納者への督促状案など、会誌の発行部数などが審議を経て了承されました。ニューズレターの発行、会誌21号の進捗状況、現会員数、院生組織の活動、2018年ISLE-EAについての報告がありました。また併せて大会が行われました。石牟礼道子氏追悼シンポジウムや、南方熊楠シンポジウムを中心に興味深い研究発表が行われ、活発な議論がありました。詳細については、本NL特集をご覧ください。大会実行委員の今村隆男氏に厚く御礼申し上げます。

■2019年度 ASLE-Japan /文学・環境学会
全国大会のご案内

と き：2019年8月31日(土)～9月1日(日)
ところ：大東文化大学 (板橋キャンパス) (*予定)
(〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1)
大会実行委員：日野原慶 (大東文化大学)
*スケジュール、プログラムにつきましては、詳細が決まり次第、会員メーリングリストやホームページなどでお伝えします。また研究発表、企画も募集いたします。多くの会員のみなさまのご参加を心よりお待ちしております。

<会費納入のお願い>

2018年度の年会費 (一般5,000円、学生2,000円) の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)
※ゆうちょ銀行以外の銀行から振り込みされる場合は以下の情報をご利用ください。
ゆうちょ銀行 一三九 (いちさんきゅう) 支店
(店番：139) 当座預金口座番号：0093821

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、9名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

■2020年東アジア環境文学国際シンポジウム
International Symposium on Literature and Environment
in East Asia (ISLE-EA) を神戸で開催する予定です。

と き：2020年11月21日(土)、11月22日(日)
ところ：甲南大学 (*予定)
(〒658-0072 兵庫県神戸市東灘区岡本8丁目9-1)
シンポジウム実行委員：浜本隆三 (甲南大学)
*開催に向けた準備へのご協力、みなさま、どうぞ宜しくお願い致します。

広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/>会員による出版物/
今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光 (hiro2827★gmail.com) までお送り下さい。次回の更新は2019年5月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

会誌編集委員会より

『文学と環境』投稿における引用・参照と引用文献の書式について、e-bookやオンライン・ジャーナルの参照例を加えるなど更新しました。加筆・修正点については、学会ウェブサイトにてご確認ください。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに学会ホームページの該当箇所をご参照いただき、担当役員にご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

..... 編集後記

大雨、猛暑、台風、地震——それらがまたやってきた夏でした。

9月6日未明、札幌も揺れました。そして停電。電気・水・食料・情報が再び流れだしたとき、テレビ画面には、崩れた山と、ふだん搾乳機で人の社会に接続されている乳牛たちが乳腺炎で倒れている姿がありました。

和歌山ならではの企画満載だった全国大会や南部弁の響いた例会の報告などをお届けする今号のあちこちで、便利さと生、身体、場所と結びつくことといったテーマがこだましています。Walkmanが特別だった頃、そして今、どんな風に世界とつながりたいのか改めて考えるきっかけにしていだければ幸いです。(M.T)



【発行】
代表 結城正美
事務局 近畿大学 辻和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江3-4-1
Tel/Fax: 06-6721-2332 (内線3400)
E-mail: twain1910★gmail.com

【編集】
編集代表 札幌大学 豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡3条7丁目3-1
Tel: 011-852-1181 (代表)
Email: toyosato-m★sapporo-u.ac.jp